

## 音楽情報処理のミニレポート

### 1) 自分が好きな曲を選び、音楽的な分析を用いて理由を述べよ

今回選んだ楽曲は King gnu の「傘」である。このレポートではコードを主に分析していく。Key は B $\flat$ (Gm)である。マイナー調であると思われるが分析の際は B $\flat$ を基調として記述する。構成はイントロ→A メロ→B メロ→サビ→A メロ→B メロ→サビ→間奏→ラスサビ→アウトロとなっている。用語の詳細な説明は長くなるため割愛する。

始めにイントロを分析していく。イントロにはサビと同じコード進行とメロディが使用されている。コード進行は Gm(VIm)-Cm(II m)-F(V)-B $\flat$ (I)-A7(VII)-Dm(III m)-B7(II $\flat$ )-E7(V $\flat$ )が一区切りである。まずは最初の4つを見ていく。この進行には II m-V-I が含まれる。これはツーファイブワンであり、強進行とドミナントモーションという2つの要素を含んでいることによって、緊張感を増してから一気に解放する効果を与える(厳密に言えばドミナントモーションは V7-I である)。この VIm-II m-V-I という進行は見られることが少ないが、I-VIm-II m-V はジャズなどでよく使用される。次にその後の4コードを見ていくが、ここからかなり様子が変わる。理由はノンダイアトニックコードが、それも非常にいびつに出現するからだ。今回の場合、A7 と B7、E7 がノンダイアトニックコードである。これらを使うことで曲に色味がでて、いわゆるエモい曲調を醸し出すことが出来る。この3つを通して何がいびつかというと、総じてスケール外の音が非常に多いことだ。A7 では C $\sharp$  と E、B7 では B と F $\sharp$ 、E7 に至っては E と G $\sharp$ に B である。A7 に関してはブルーノートと捉えることができ、E7 も裏コードと考えることは出来る。問題は次の E7 である。これは B $\flat$ を基準に考えると解釈が難しい。しかし、ここでこの調は Gm でもあることを考えるとそう難しくはない。結論から書くと、これらノンダイアトニックコードはスケール E のダイアトニックコードと捉えることができ、E と G は同主調の関係であるのだ。ここで先ほどの裏コードの意図が明確になる。A7 と B7 は先の記述通り基調 B $\flat$ から解釈ができるが E7 は難しい。そこでモーダルインターチェンジを行うことでワンクッションおいているのだ。B7 は E の V7 であると同時に G のセカンダリドミナントでもある。こうすることで、B $\flat$ →G→E という同主調の受け渡しをスムーズに行えることに加え、ドミナントモーションによってここだけで一区切りつけることができ、もとのスケールに戻る際に成るべく違和感が少ないように作られていると推測できるのだ。これが歪に感じるはずの音を安定的に聴ける秘密だと考える。サビの終わりでは G7 が使用されているが、言わずもがな同主調 G からの借用和音である。これは E から見たマイナーであり B $\flat$ から見たメジャーであるため、7 の効果も相まって明るさの中に何か穏やかならないものを感じさせる。メロディにも少しだけ触れておく。この曲の全体的に言えることだ

が、スケール外の音を用いた半音移動が多くこれもエモさを与える要因となっている。イントロ部分のギターが特に印象的で、D→D♭→Cと半音ずつ下がることで聴者を惹きつける役を果たす。これは official 髭男 dism の「ノーダウト」のイントロでも使用されている。また、「心模様は〜」のところはB♭のコードに対してD♭というコード外のマイナー音でぶつかっていることで暗く引っかかるような印象を与えている。先と同じバンドの楽曲「Pretender」でもサビの部分で出てくる。ボーカルは全体を通してオクターブのコーラスを基本的に織り交ぜており、これを交互に表に出すのが King gnu の楽曲がもつ特徴の一つである。

A メロに移る。コード進行は Cm(II m)-B♭6(I)-A♭maj7(VII♭)-B♭(I)-Bdim(II♭) が一つの区切りである。Cm-B♭6-A♭maj7 では G の音が保持されていることでなだらかに聴こえる。VII♭はノンダイアトニックコードであり、曲に変化を与える。Pops ではよく使用されるイメージがある。B♭-Bdim-Cm と進むことでルート音がクリシェになっており、コード進行がスムーズに聴こえる。これもよく見られる手法で、LiSA の「紅蓮華」のサビにも使用されている(傘の調を E♭ と仮定して数字を振り直すとより分かりやすい)。また、互いに進行が刺繍のようになっていることも共通点としてあげられる。メロディにも少し触れる。A メロの最後「コーヒーを流し込め」というところは音階を一段ずつ上昇している。もちろん B メロへの期待感を押し上げるためのものだと思われるが、もう少しだけ深く見てみたい。Mrs. GREEN APPLE というバンドの「StaRt」という曲では音階を基調の音から上へなぞっていくメロディがあり、そのほかいくつかの楽曲にも見られる。これは楽曲をよりキャッチーなものにするため入れていると言われている。ここで傘のメロディに戻る。このメロディは B♭の音階ではないが、Gm のメジャー音と B♭のマイナー音が含まれている。それによって明暗が不安定になりながらもどこか心に来るメロディになっているのではないかと推測する。

B メロの分析に移る。コード進行は Gm(VIm)-Gm7/F(V)-E♭maj7(IV)-Am7-5(VIm)-D7(III)が一つの区切りである。初めの Gm-Gm7/F-E♭maj7 は分数コードを使用して D の音を保持している。Am7-5-D7 はフラット 5 からの 7 で少し次への期待感を持たせながらも落ち着きを見せた印象となっている。メロディについても少しだけ話す。一回目の D7 が現れるときのメロディが倚音となっている。これは 2 コーラス目の「立っていたんだ〜」というところがわかりやすい。これによってメロディに耳がいきやすくなる。

サビはイントロで記述したことと同じなので割愛する。メロディを少しだけ分析すると、2 コーラス目とラスサビの最後は先ほど書いた上昇するメロディの派生版のような感じになっている。間奏ではサビのメロディを別の楽器が演奏している。このときにオブリガートが表に強く出ている。

## 2) 授業の感想

興味のある部分だったので非常に楽しく受講した。